字のないはがき④　向田邦子

二年（　）組　名前（　　）

めあて◆立場を換えて書き換えてみよう。（その２）

～想像をふくらませて、父の心情を読みとろう～

【元の文】

終戦の年の四月、小学校一年の末の妹が甲府に学童疎開をすることになった。既に前の年の秋、同じ小学校に通っていた上の妹は疎開をしていたが、下の妹はあまりに幼く不憫だということで、両親が手放さなかったのである。

ところが三月十日の東京大空襲で、家こそ焼け残ったものの命からがらのめにあい、このまま一家全滅するよりは、と心を決めたらしい。

妹の出発が決まると、暗幕を垂らした暗い電灯の下で、母は当時貴重品になっていたキャラコで肌着を縫って名札をつけ、父はおびただしいはがきにきちょうめんな筆で自分あてのあて名を書いた。

「元気な日はマルを書いて、毎日一枚ずつポストに入れなさい。」

と言って聞かせた。妹は、まだ字が書けなかった。

あて名だけ書かれたかさ高なはがきの束をリュックサックに入れ、雑炊用のどんぶりを抱えて、妹は遠足にでも行くようにはしゃいで出かけていった。

【リライトの例】

パターン１

終戦の年の四月、妻と何度も話し合いを重ね、ついに小学一年の娘を甲府に学童疎開させることにした。既に前の年の秋、同じ小学校に通っていた上の娘は疎開をさせていたが、下の妹はあまりに幼くかわいそうだということで…

パターン２

昭和二十年四月、私はついに小学一年の娘を学童疎開させる決意をした。見知らぬ土地での暮らしはさぞ不安であろうし、疎開先の人とうまくいくのだろうか、食糧は足りるのだろうか、と心配ばかりが先に立つ。…

～ここから先の続きを書いてみよう～